名古屋芸術大学研究紀要第34巻　047～062頁（2013）

アメリカ音楽文化を創造したヨーロッパとは何か
― 旧世界と新世界の邂逅と融合における歴史的一考察 ―

Europe's Influence on the Creation of American Music Culture
―― An examination of the historical relationship between the Old World and the New World ――

上田　智美　*UEDA satomi*
（音楽学部）

序

ある文化の歴史を描くにあたって最も困難をきわめるのは、その起源に関してであり、アメリカもまた例外ではない。そもそもアメリカ大陸と先住民が培っていた諸文明（アステカ、マヤ、インカ、イロコイ等）は、コロンブスが1492年に「発見」する以前より存在していたのであって、「アメリカ」という名称と理念は、ヨーロッパ人が後から新たにつくりあげたものである。

現在われわれの言うところの「アメリカ」とは、強引に言えば、ヨーロッパが半ば力づくで見知らぬ他者を征服し再形成させた「新ヨーロッパ」という意味での「新世界」にほかならないのだ。アメリカとはヨーロッパ人が“発見”したものではなく、“発明＝捏造invent”したものだと主張する歴史家群の代表格E.オゴルマンは次のように述べている。「アメリカの示した歴史的存在は、当時のキリスト教的基準によれば、精神的意味の不足のために拒否された。アメリカは一つの潜在力にすぎず、ヨーロッパ文化の理想と価値を受け入れ遂行することによって実現されるだろう。実際アメリカは、もう一つのヨーロッパになったとき初めて歴史的意義を獲得できた。それこそ、アメリカのために発明された精神的ないし歴史的な存在であった。新しい陸地の歴史的存在をこういうふうに考える方法は『新世界』という名称の中に表現されている[1]。」

したがってアメリカとは、ヨーロッパが「新世界」という鏡におのれのイメージを投射し変容をくりかえすことによって再生しつづける、もう一つの新しいヨーロッパ像と、言い換えることもできる。この試論における私の目的は、アメリカとヨーロッパを分離させて個々に考察するというよりもむしろ、二つの世界の邂逅から生じたグローバルな文化現象を概観して俯瞰的に描くことにある。それは、過去形で描かれる対象でなく、常に躍動感あふれるものとして綴られる“歴史＝物語”でもある。

ヨーロッパ音楽文化は、いかにして「新世界」に移植され再構築されていったのか。また逆に「新世界」の出現は、ヨーロッパにどのような衝撃と影響をもたらしたのか。この小論は、私自身の長期にわたる欧米滞在と個人的体験に基づく大西洋史観的な視点に立ったうえで、ヨーロッパとアメリカ相互の音楽文化融合と交流の本質をなすものを明らかにしようとする試みである。

今回発表する第一部では、新大陸「発見」を導いた15～16世紀ヨーロッパを、さらに次回から第二部以降では16～18世紀アメリカ植民地時代を中心に考究する予定である。物語の第1ページは、「旧世界」と「新世界」が遭遇するきっかけを促した大航海時代までさかのぼる。

第一部　ヨーロッパ大航海時代

●第1章

＊ヨーロッパのイタリア人ネットワーク

イタリア・ルネサンスの影響が14世紀頃からヨーロッパ各地に広まり、やがてキリスト教信仰を中心に動いていた中世社会から人間－個人－の自由意志を尊重する人文主義時代がはじまると、探検家や航海家など新しい「個人業」に従事する人間が歴史の舞台上に登場してきた。

古代ローマ時代より“地球の中心の海”もしくは“われらの海（マレ・ノストルム）”とヨーロッパ人から呼ばれ親しまれてきた地中海。13世紀から14世紀にかけて、この海の覇権をかけて争ったのが、二つの強大な海洋国家ヴェネツィアとジェノヴァである。特に15世紀初頭ヴェネツィア共和国の海軍力と領土の広さは頂点に達し、「静謐このうえなき共和国（ラ・セレニッシマ）」と尊称されるほどの繁栄ぶりを極める。その東地中海全域を支配下とする海軍の強大さはヨーロッパ随一で、45隻の大型ガレー船、300隻の大型帆船、3000隻の小型帆船を所有し、総勢3万5000人を越える船員を雇用していたほどだった[1]。

一方ジェノヴァは主に西地中海圏に勢力を伸ばし、13世紀には「ジェノヴァ人は数が多く、世界中に散らばっているので、彼らは行く先々で新しいジェノヴァを建設する」ほど、商人たちは敵対関係にある諸国にあっても、海上や陸上とを問わずヨーロッパ各地で活動していた[2]。15世紀にはアラゴン国王アルフォンソ五世（1396-1458：在位1416-58）治下のバレンシアやバルセロナ、そしてナポリやシチリアにいたる領土内で、ジェノヴァ人の勢力は最高潮に達する。さらに15世紀半ばには「メディチ銀行」子会社網がヨーロッパ経済の主要地点におかれ、メディチ家に結びついたフィレンツェやピサのトスカーナ人が大規模な商取引を行っていた[3]。これら先人たちの布石によって探検家コロンブスの夢は実現化していくのだ。大航海時代よりはるか以前より、イタリア人の世代を重ねた広大な地縁ネットワークがヨーロッパ諸国で形づくられていた事実を念頭においておくことは、15世紀から16世紀にかけてのヨーロッパというものを理解するうえで重要である。

＊ポルトガルの台頭

大航海時代の幕開けを促した立役者の一人が、ポルトガル国王ジョアン一世（1357-1433：在位 1385-1433）とイギリス国王エドワード三世の孫娘フィリパの三男として誕生したエンリケ（1394-1460）である。エンリケ王子は、その生涯を探検航海－海路で東洋に到達するという航海政策の促進に力を尽くした。1415 年ジョアン一世は、古来“ヘラクレスの柱”と称されるジブラルタル海峡の北側に位置し、地中海と大西洋の十字路ともいうべく海路の重要地点でも北アフリカの町セウタを攻略。ポルトガルがヨーロッパ海上交易覇権を握ろうと画策をはじめたところから、大航海時代の幕は切って落とされる。エンリケが“航海”王子という名を後世に遺すゆえんは、航海探検開拓の舞台を地中海からヨーロッパの境界である“ヘラクレスの柱”を越えて大西洋の大海原へ、さらに南下してアフリカ西沿岸部南方へと拡大させた点にある。しかも、王子が収集した膨大な地図コレクションのうちイスラム教諸国が作製した海図は、地中海以外の海路に不案内だった当時のキリスト教徒ヨーロッパ人を未知の世界へと誘うに十分の説得力があった[4]。

15 世紀半ばになると、ヨーロッパ全体がアフリカ探検に本腰を入れ出す。が、エンリケ亡き後も、ポルトガルの航海熱はおとろえるところを知らない。この大叔父の意志を継いだのがアフリカ航路開拓への関心および地理学に造詣が深かったジョアン二世（1455-1495：在位 1481-1495）だ。彼の支援のもと、パーソロミュー・ディアズ（1450 頃 -1500）が 1488 年アフリカ大陸西海岸を南下して喜望峰に到達、1498 年にはヴァスコ・ダ・ガマ（1469-1524）がアフリカ経由のインド航路を開拓する。さらに 1511 年に第二代インド提督アフォンソ・デ・アルブルケ（1453-1515）の艦隊が交通の要衝であったマラッカ王国を滅ぼし東方進出の拠点としたことにより、その後百年間ポルトガルはアジアへの航路を独占、交易ネットワークを拡大する。インドのゴアと中国のマカオを植民地とし、日本の長崎にも多数のキリスト宣教師を送りこんだ。ちなみに日本を最初に「発見」したヨーロッパ人こそ、戦国時代末期の 1542 年（日本の記録では 1543 年、天文 12 年）に種子島に漂着したポルトガル人であり、鉄砲伝来すなわちヨーロッパ式小銃（火縄銃）をわが祖先達にもたらした。

しかも航路だけでなく陸路遠征にも成功する。ペドロ・ダ・コヴィリャン（1450 頃 -1545）が商人として、カイロ、アデン、そしてインドのカラカットまで足を延ばし、東アフリカ沿岸を経由して帰国したのだ。こうしてポルトガルはアフリカから多くの先住民を奴隷として自国に輸入し、黒人奴隷史の第 1 ページを開いた。真偽はともかく、ブラジルとポルトガル両国の見解によると 1500 年 4 月 22 日ポルトガル人ペドロ・アルヴァレス・カブラル（1467/68-1520）が最初にブラジルに到達したと言われている。ちなみに 1513 年にはスペイン人バスコ・ヌーニェス・デ・バルボア（1475-1519）が太平洋を「発見」、また 1519 年にはポルトガル人フェルナンデ・マガリャンイス（英語名マジェラン）（1480

-1521）が、エンリケの甥にあたるスペイン国王カルロス一世（神聖ローマ帝国皇帝カール五世：1500-1558：在位1516-1556）〔以下、カール五世と記す〕の命で世界周航に臨んでいる。

＊スペインの台頭

大航海“黄金”時代を築き、東からの「インドへの道」開拓という大偉業をなしたポルトガルだが、じきにスペインにその座をゆずることになる。15世紀末頃のイベリア半島は、カスティーリャ・イ・レオン、アラゴン、ナバラ、グラナダ、ポルトガルという5つの王国に分割されていたが、ここではポルトガルを除く4王国の総称としてスペインの呼称を用いることにする。それでは、ポルトガルにかわり、16世紀スペインが最も積極的に長期にわたって新大陸征服事業を推し進めることができたのは、いかなる理由からなのか。

まず、十字軍精神を基盤とした軍事的伝統が、中世スペイン（厳密にはカスティーリャ・イ・レオン王国）にできあがっていたこと。さらに、イベリア半島全体が航海上の豊かな経験と伝統を培っていたことがあげられる。しかも、新大陸に進出するための絶好の実験場をスペインはすでに確保していた。ポルトガルに対して、ギニア、フェズ王国、マデイラ諸島、アゾレス諸島に独占的な権利を保持することを認めるかわりに、スペインはカナリア諸島という最初の海外領土を得たのである。カナリア諸島は新大陸航路において地理的に非常に有利な場所に位置しており、実際にコロンブスの船隊は計四回の航海探検ともカナリア諸島で途中停泊している。ちなみに14世紀初頭カナリア諸島を最初に「発見」したのはコロンブスの先達であるジェノヴァ人ランツァロット・マルチェッロだった。そののちノルマンディー人ジャン・ド・ベタンクール（1360頃-1425頃）による征服をへて、15世紀初頭に同諸島はカスティーリャ・イ・レオン王国に併合される[5]。このような過程で、カナリア諸島はスペインが海外植民活動を始めるうえで、格好の経由地となった。

またスペイン領土の拡大発展も拍車をかけることになる。アラゴン国王フェルナンド（1452-1516）とカスティーリャ・イ・レオン国女王イサベル（1451-1504）－カトリック両王－の結婚、そしてカール五世の出現によって「旧世界」から「新世界」にまたがる広大な帝国建設が可能となる。カール五世は、カトリック両王の娘でありカスティーリャ・イ・レオン王国継承権を持つ母ファナ“狂女王”（1479-1555）から、スペイン、サルディニア、シチリア、ナポリ王国、アフリカや新大陸の植民地を、そしてブルゴーニュ公家出身の父フィリップ美公（1452-1516）からは、フランス北部と西部、ネーデルランドやルクセンブルクの相続権を引き継ぐ。さらに、ハプスブルク家出身の祖父、神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン一世（1459-1519）の薨去後、オーストリアとボヘミアがカール五世の膨大な遺産に追加される。シャルルマーニュ（カール大帝：742-814：在位768-814）以来の大帝国の誕生だ。

カール五世に嫁したイサベルはポルトガル王マヌエル一世（在位 1495-1521）とカトリック両王の娘マリアの子でカールの従姉妹。さらにマヌエル一世が後にカール五世の姉レオノールと再婚するので岳父かつ義兄でもあるという両国の錯綜した緊密な血の交わり方は、すでにポルトガルがスペインとの一体化に同調する兆しでもある。現実に、カール五世とイサベル妃の嫡男スペイン王フェリペ二世（1527-98：在位 1556-98）がポルトガル王女マリア・マヌエラを妻としたことも要因の一つとなり、1580 年スペインはポルトガルを合併する。これによって従来のスペイン支配領ネーデルランド、ルクセンブルク、ミラノ、ナポリ、シチリア、メキシコ、ベネズエラ、チリ、ペルー、アルゼンチン、カリフォルニア、フロリダ、フィリピンに加えて、ポルトガル領ブラジル、マラッカ、マカオ、ゴア、セイロン、アフリカ諸都市まで懐に転がりこんできたというわけだ。

余談になるが、フェリペ二世とマリア・マヌエラ王妃の息子は祖父（カール五世）の名に因み「カルロス」と名づけられ、後にヴェルディの傑作オペラ『ドン・カルロ』のモデルとなった人物である。しかし実際は異常なまでの血の濃さゆえか身心とも先天的に脆弱な王子で、晩年は父に反逆した罪で逮捕監禁、自殺未遂の末に牢内で病死という悲惨な最期を遂げた。

＊カール五世の大帝国

カール五世はその生涯の大半（約 40 年間）をヨーロッパ、アメリカ、アジア、アフリカに領土を有する「太陽の没することのない帝国」巡幸の旅に費やし、少なくともヨーロッパにおける自分の支配する領土には足を運んでいる。もっともカールの頭にあった帝国思想は、彼の帝国自体がそうであったように、あくまでもヨーロッパ的なものであり、実際に新大陸の領土（西インド諸島およびヌエバ・エスパーニャ［現メキシコ］）の帝位を称することにはなんの興味も示さなかった[6]。というのも、その国力の源泉が圧倒的にヨーロッパにあったからで、1521 年から 1544 年にかけては、ハプスブルク家の世襲地にある鉱山は、新大陸産銀全体のほぼ四倍もの銀を産出していた。この数字が逆転したのは、1545 年から 1550 年代のカール晩年にかけてのことだった[7]。そして 1560 年から 1640 年においての 80 年間スペインは、東の世界イスラム教圏および西の世界キリスト教圏にとっても、ヨーロッパ最強の大帝国として世界の中心に君臨することになる。この時期における新大陸－アメリカ－は、帝国主義という 16 世紀ヨーロッパの最初の偉大な冒険をはじめてスタートさせた要因ではなかったにしろ、ともかくそれを維持せしめた要因ではあった[8]。

カール五世は音楽を非常に愛好した皇帝でもあり、1516 年即位した時に、お気に入りの音楽家で特にモテット作曲家として高名なニコラス・ゴンベール（1500 頃-56）を“フランドルの聖歌隊 cappilla flamenca ”と共にブルゴーニュの宮廷からスペインへ連れて

いったほどだった。ちなみにゴンベールと袂を分かちあっていた同世代のネーデルランド地方出身の音楽家が、ヴェネツィア楽派の開祖となるアドリアン・ヴィラールト（1490頃-1562）である。ネーデルランド出身の音楽家たちはスペインでも大きな影響を及ぼしたが、かれらと並んで多くのスペイン人音楽家が活躍していたことも記しておかなければならない。アントニオ・デ・リベラ、フアン・エスバリノ、ペドロ・フェルナンデス、そしてゴンベールやヴィラールトと同水準に達した楽匠クリストバル・デ・モラーレス（1500-1553）が出現した[9]。このモラーレスの弟子たちが、後に新大陸スペイン植民地においてヨーロッパ芸術音楽を広める源泉となっていく。

新大陸が「発見」された1492年、当時のヨーロッパ政界を席巻したロドリーゴ・ボルジア（スペイン語名ロドリゴ・デ・ボルハ）（1431-1503）というアラゴン王国バレンシア地方出身のスペイン人貴族が、カトリック両王の強い後押しもあってローマ教皇アレッサンドロ六世（在位1492-1503）に選出された。翌年には、改宗化を目的に新大陸をスペインとポルトガルに分割することを許可した教皇大勅書（「インテル・カエテラ」）が発行され、地球の反対側までの全域がスペインのものとなるだろう。しかし、ポルトガルが黙っているはずがない。ジョアン二世は領域の境界線の移動を求めてスペインとの交渉会議をトリデシリャスの地で開く。その結果、トリデシリャス条約が1494年に発令。スペインはこの条約でアジア＝「インディアス」を獲得したと考えているが、実際に得た領土は境界線の西側に位置する新大陸と広大な海－大西洋－なのだ。一方、ポルトガルは境界線の東側に位置する現ブラジルとそこに至るまでの航路、つまりアフリカ、インド、中国、東南アジアを獲得するのである。

＊ブルゴーニュ公国の宮廷文化とネーデルランド楽派

ブリュッセルから電車に乗って30分ほど北上すると、ブルゴーニュ公国首都だったメッヘレン（マリーヌ）に到着する。ヨーロッパで最も美しい響きと称されるカリヨンのまろやかな音紋があたりいちめん漂うなか、街中をぶらぶら歩いてみる。ここは、観光化の邪気にまだ汚されていない無垢な素朴さに包まれていて、それがまたこの世のものとは思えない夢のような雰囲気と相まって、幻想的空間を生み出している。

大航海時代のブルゴーニュ公国宮廷には優れた音楽家や画家や文学者達が集い、メッヘレンは薫り高い芸術の都として栄えた。とりわけ15･16世紀ヨーロッパ音楽と言えば「ネーデルランド（フランドル）楽派」と称されるほどに、ブルゴーニュ公国が領有するネーデルランド地方（現在のベルギーやオランダ地方）出身の音楽家達はヨーロッパ中で華々しく活動しており、かれらの影響はやがて新大陸へも拡大していくことだろう。当時ブルゴーニュ宮廷を中心に活躍していた代表的作曲家達（ブルゴーニュ楽派とも称される）が、ギョーム・デュファイ（1400頃-74）やジル・バンショワ（1400頃-60）、そして司祭兼詩

人でもあったアントワーヌ・ビュノワ（1430頃-92）である。

ここで注目すべき点は、15世紀から16世紀において国境をまたいで活躍していたネーデルランド人によってはじめて、音楽における全ヨーロッパ的性格というものが形成されてきたということである。ルネサンス音楽の権威フリードリヒ・ブルーメによると「多声音楽は、このうえなく幅広い、それ以前にはそのようなものに触れたことがなかったような階層に浸透したのであり、音楽史においてはじめて、学者と著述家、造詣芸術家と都市貴族などの姿をした一種の教養市民が、学芸保護者（マエケナス）としてであれ、みずから創造者として、ある役割を演じはじめる。音楽の消費量は異常なほど大きく、諸国民、諸宗派、社会の諸階層、公的ならびに私的な機関の音楽育成、新作創作および演奏への関与は、中世とは比較にならぬほど著しかった。したがって創作し演奏する音楽家に課された使命は、何倍にも増大したのである[10]」。

現在われわれが“クラシック音楽”と称しているものは、狭義における18・19世紀の主にオーストリア・ドイツ圏ヨーロッパ音楽を意味するが、この自律したヨーロッパ芸術音楽というものが、15世紀から16世紀にかけて主にネーデルランドおよびイタリアにおいて萌芽した事実を見逃してはならない。さらに、それらは新大陸征服および植民事業の発展に伴う数多のヨーロッパ人によって「新世界」に移植され、のちにアメリカ芸術音楽として形成されていく基底音ともなったのである。

●第２章

＊コロンブスとは何者か

ここでヨーロッパがアメリカを“発明＝捏造”していくきっかけをもたらした男に登場してもらおう。通称クリストファー・コロンブス。イタリアではクリストフォロ・コロンボ＝鳩と名乗る。末息子フェルナンドは父親の偉業を次のように書き残した。「新世界の数多くの国に精霊をもたらした鳩。救済者イエスが、洗礼の日にやってきた鳩に神の子だと告げられるまで自分の使命を知らなかったように、これらの国々もみずからにめざめていなかったのである[1]」。またスペインでは、クリストバル・コロン＝小作人と名乗る。フェルナンドいわく「インディアンたちを悪魔の手から解放し、天国の小作人に導いた[2]」らしい。ちなみにコロンは植民者という意味もあるから、なかなか暗示的な名の選択だ。なんとも名前からしてカメレオンのごとく、人を喰ったような演出ぶり。旅する者の守護聖人クリストフォロスにちなんで名づけられたこの男こそ、歴史上もっとも有名な旅人の一人となるだろう。

コロンブスの素性が謎に包まれているがゆえに、今まで数え切れないほどの伝記や研究書が著され各国語に翻訳出版されてきた。出生地ひとつをとってしても、イタリア、スペ

イン、イギリス、ギリシャ、アルメニア、ドイツ、ポルトガル、スイス、スカンディナヴィア等々いろいろ取り沙汰されるくらいだ。一般的には、ジェノヴァあるいはその近郊で1451年の8月26日から10月31日の間に生まれ、1506年5月20日スペインのバリャドリーで亡くなったという説に落ち着いているようである[3]。さらにコロンブスにはユダヤの血が流れているという説もかなり根強い。もしかりにそうだとしたら、なかなかおもしろい推察ができる。コロンブスがイザベラ女王に航海案援助を受けるために申し出た1485年頃のスペインは、キリスト教徒以外の異教徒追放の動きが急激に強まってきた時期と重なる。1478年には異端審問所が設置され、悪名高き初代大審問官トマス・デ・トルケマダ（奇怪な矛盾であるが彼自身もユダヤ系だった）が常にユダヤ人の動静に目を光らせていていた。とはいえ、過去の何世代にもわたりキリスト教徒を装い、地位と財を築き上げてきたユダヤ人“マラーノ”（スペインでキリスト教に改宗したユダヤ人呼称）は、結婚によって貴族とのつながりを強化し、当時のスペイン各王家を含む貴族の家系で、ユダヤ人の血の「痕跡」がまったく見られない者はほとんどいなかった[4]。カトリック両王フェルナンドでさえ祖母からユダヤの血を受け継いでいるくらいだ。

そこで考えられるのが、ユダヤ人のための早急の新しい移住先の探求と確保である。コロンブスの西方ルート「インドへの道」開拓案計画に五年以上も回答を出し渋ったスペインの諮問委員会がいったん援助を断ったものの、急遽一転して計画を受け容れるというどんでん返しをやったのは、どうやらユダヤ人が絡む複雑な裏の駆け引きがあったらしい。スペイン宮廷が、ユダヤ人追放令を布告すると同時に、コロンブスとの交渉が成立。コロンブス率いる探検船隊（計三隻）へのユダヤ人乗船許可（出国法令）、聖職者（キリスト教）が同乗しないという異例の事態。なんと奇妙な同時性。権力をもったマラーノが、コロンブスを影で支援しユダヤ新天地を見出させた真の黒幕だった－といろいろ想像を膨らますのはなんとも楽しいものだが、勝手気ままな憶測はここまでにしよう。

今コロンブスを描いたと言われる七枚の肖像画を見ている。生前に描かれた信憑性の高い肖像画というのは、一枚もない。特によく知られているのは、リドルフォ・ギルランダイヨ作の肖像画だろう。あとの六作品は作者不詳だが、どれもコロンブス初老の頃－新大陸「発見」直後－を描いたものと思われる。憂いを帯びた表情、険しく鋭い眼光、はげあがった広い額、大きなワシ鼻、薄い唇に固く閉じあわされた口元、ふさふさと長く垂れ下がる白髪（もとは燃えるような赤毛だったらしい）・・・。肖像画以外にも、私は彼－彫像－に出会ったことがある。一度目はスペインのバルセロナ、二度目はプエルトリコのサン・フアンで。いずれの地でもコロンブスは、堂々たる姿勢で海の彼方のはるか遠くを見つめていた。

＊コロンブスの時代

コロンブスが生まれた15世紀半ばのヨーロッパは、中世末期からルネサンスという新しい時代に移り変わろうとする端境期にあたる。すでにアジアでは、明の鄭和（1371-1434）がヨーロッパ大航海時代をさきがけて三万人弱の大船団を率いて海原にのりだしており、1404年から33年にかけて七回にも及ぶ南海・インド洋遠征を試みていた。この時代にすでにジャワからアフリカ東岸までの三十以上もの国が、明と通商貿易を行っていたのである。古代から中世にかけて世界貿易の中心は、中国が交易実権を握っていた環インド洋－南シナ海圏にあり、なかでも中国経済の画期的な高度成長を促したのが宋代（960-1279）と元代（1279-1368）であった[5]。元すなわちモンゴルは内陸アジアの遊牧民であるが、南宋に対抗するために水軍編成に努め、これを1279年に滅亡させると南シナ海からインド洋に至る広大な海域を手中に治める一大海上帝国となる。さらに中国内部では大運河が補修され、ユーラシア大陸を横断する陸路と海上の道が有機的に結びつけられて、中国南部の泉州は宋代以上に繁栄をきわめた[6]。マルコ・ポーロ（1254-1424）が訪れて眼を見張った光景は、まさにこの泉州の港であり、『東方見聞録』において「アレクサンドリアには、キリスト教国に供給するための胡椒を積んだ船が一隻入港するのにたいして、このザイトン（泉州）には百隻以上の船が入港する[7]」と驚嘆している。とすれば大航海時代の幕開けを切るのは鄭和の大船団－中国－であってもおかしくなかったのだが、どういうわけか現実に世界の海を制覇するのは、その頃はまだ弱小国ヨーロッパであった。

それでは、コロンブスが生まれ育ったジェノヴァとはどのような街だったのだろうか。15世紀におけるジェノヴァとヴェネツィアは「ヨーロッパ資本主義の心臓部」（ブローデル）であり、旅人が驚嘆して忘我するほど壮麗な都市だったようだ。とりわけジェノヴァは、イタリアのほとんどの主要都市が経済の停滞に悩み苦しんでいた時期に、拡大と進取を先駆ける根っからの斬新的な“冒険”気質に恵まれていた。しかもペスト大流行後に出生率はうなぎ上り、スペインやフランスからの移民も増大して15世紀末までには人口10万もの大都市に成長していた[8]。そのうえジェノヴァは当時ヨーロッパにおいてもっとも通貨取引が自由な場所であったから、イタリアにおいて抜群の経済的成功をおさめるのは必然であり、その後もしばらく「心臓部」として大いに栄えるのである。

とはいえ、最大のライヴァルである“東の雄”ヴェネツィア商人とは対照的な性格を示す。ヴェネツィア人が絢爛豪奢で官能主義的な生活を好んだのに対し、“西の雄”ジェノヴァ人は質実剛健で現実主義的な生活を好んだ。すなわち、他の諸国が学芸文化を主に奨励し培っていく一方で、ジェノヴァはその情熱をひたすら貿易－海－にかけて生き抜くのである。 大航海時代に活躍する貿易商人や探検家を数多く輩出した15世紀ジェノヴァには、人々が海と親密に結びついた特有な空気が町中に沸々とみなぎっていた。

実際に15世紀から16世紀にかけてコロンブスをはじめとする数多の航海探検家が命が

けの冒険を試みた事実には非常に心打たれるものがある。新大陸「発見」者を挙げるだけでも、ファン・ポンセ・デ・レオン、ディエゴ・デ・アルマグロ、ディエゴ・ベラスケス・デ・クエリカル、フアン・セバスティアン・エルカーノ、パンフィロ・デ・ナルバエス、ガルシア・ホフレ・デ・ロアイサ、エルナンド・デ・ソト、アンドレアス・デ・ウルデナーダ、フランシスコ・エルナンデス・デ・ゴルドバ、セバスティアン・デ・ベラルカサル、フランシスコ・バスケス・デ・コロナド、トリスタン・デ・クーニャ、フアン・ディアス・デ・ソリス、ジョアン・フェルナンデス・ラヴラドール、ジョヴァンニ・ダ・ヴァラッツァーノ等々、圧倒的にイベリア半島出自の探検家が目立つ。かれらは、狂おしいまでの情熱と野望を抱いた人間を激しく欲した15・16世紀という時代の申し子だったのだろうか。命がけの冒険を試みたのは、ヨーロッパ人だけではなかった。この時期すでに多くの名も知れぬ日本（倭）人航海探検家および商人たちも、メキシコやインド、そして東南アジアにかけての広い海域で活躍していたのである。

●第３章

＊コロンブスとスペイン

コロンブスが提案した新航路は、貿易風によって驚くほど容易に航海できたため[1]、短期間で大勢のスペイン人が新大陸に渡ることができた。この西側からの新しい航路を開拓するために、コロンブスは10年もの歳月を費やし[2]、実現するにはさらに8年かかった。その入念に練らされた計画は、はじめ1484年ポルトガルのジョアン二世に提出されたが、諮問委員会はその航海案の正当性を疑い、即座にしりぞける。そこでコロンブスは弟バルトロメウをイギリスのヘンリー七世（1457-1509：在位1485-1509）に派遣する。が、色よい返事は得られない。しかたなくコロンブスはカスティーリャに住む妹のもとへ赴く。ちょうどその頃スペインはポルトガルに対抗して西側ルートからアジア、すなわち「インディアス」までの新しい航路を模索中だった。16世紀初頭までのスペインは、ポルトガルと香辛料獲得の最短航路をめぐって激しい火花を散らしあっていたのである。

とはいえ、スペイン王室からの認可はなかなか下りない。1491年しびれをきらしたコロンブスはフランスのシャルル八世（1470-1498：在位1483-1498）のもとへ弟を派遣するが、再び挫折。ポルトガルのスパイかもしれない一介の異邦人の申し出を、スペイン王室は10年間にもおよぶグラナダ陥落（国土再征服（レコンキスタ）運動）を待っていたかのように、1492年1月に受け容れる。このコロンブスの「インディアス」事業提案を積極的に支持したのは、カトリック両王のうちイサベル女王であり、共にフランシスコ会第三会員という篤き信仰の同志だったことも幸いした。

長きにわたるレコンキスタの戦いで国庫の底がつき、巨万の富を喉から手が出るほど欲

していたスペイン王室は、コロンブスという男の野望にこたえるべく大きな賭けに出たというわけだ。が、そこで当てた一攫千金なる獲物は、コロンブスの大いなる誤解による産物でもあった。すなわち18世紀にいたるまでスペインは自らが統治する新大陸領土を「インディアス」(インディアスの諸王国もしくは植民帝国 Los reinos las Indias) という名で呼び続けたのである。これはコロンブスが到達した「新大陸」を古代地理の大インド(インディア・マジョール) と同一視した大いなる誤解にもとづいている[3]。今でも日本語 (カタカナ英語) でアメリカ先住民を「インディアン」や「インディオ」と呼ぶのはここに由来するが、現在これらの表現は特にアメリカ合衆国においては人種差別用語とみなされるため、「ネイディブ・アメリカン Native American 」と呼ばれるのが一般的である。名前の由来と言えば、「カリフォルニア (女勇士アマゾネスの女王カラフィアが住んでいる断崖絶壁に囲まれた島という意味)」や「アマゾン (=女勇士アマゾネス)」など、スペイン人が中世的幻想を新大陸に託して命名した名残は現在においても数々目にすることができる。

＊スペインの新大陸征服事業

スペインのイサベル女王という絶大なる支持者を得たコロンブスを、もはや新大陸－インディアス－到達のための新航路開拓への情熱と栄光の夢から覚醒させることはできない。彼自身が語っているところによると、キリスト (カトリック) 教布教を兼ねてインディアスの黄金の島「ジパング」で発掘される金銀財宝を元手に、エルサレムをキリスト教徒の地に取り戻すという、かつての十字軍の延長のような構想をも抱いていたようだ[4]。十字軍の遠征目的も、キリスト教徒の聖地奪回 (エルサレム解放) にあったが、実際にはそれを口実に東地中海沿岸に領土を拡大して植民化するという営利目的が強く後押ししていたことは否定できない。

そのもっともわかりやすい例が、1204年のコンスタンティノープル掠奪だろう。ビザンツ帝国 (東ローマ帝国) の首都コンスタンティノープルは、西ローマ帝国滅亡 (476年) 後も東西交通の要衝として様々な物質が集まる市場を多く擁していたが、そこからあがる税金や商業の利益はビザンツ帝国の経済力をいっそう高め、約700年もの間における東地中海での商業的首位の座は揺るがなかった。この安定した情況が悪化しはじめたのは、1096年に始まった第一回十字軍以降であり、商権上ビザンツ帝国と犬猿の仲であったヴェネツィア商人によって支援された第四回十字軍によって1204年ビザンツ帝国は一時的に滅亡、ラテン帝国 (フランドル伯ボードワン一世が皇帝として帝位につくが、東ローマ帝国再興を望む旧帝室残党によって1261年に滅亡) を成立させた。以後、ジェノヴァ人、ヴェネツィア人、ピサ人といったイタリア商人さらにオスマン・トルコの東地中海における活動が盛んになり、ついに1453年にはオスマン軍によってビザンツ帝国は完全に滅びるこ

とになる[5]。

西ヨーロッパ世界の反ヘレニズム感情が十字軍遠征によって最高潮に達したとはいえ、1204年ビザンツ帝国（東ローマ帝国）首都コンスタンティノープルを掠奪、暴行、虐殺とあらんかぎりの野蛮なふるまいで、千数百年もの歴史を誇る洗練された高度な文化や芸術に彩られた都を破壊していく様は、その三世紀後にバルトロメ・デ・ラス・カサスの『インディアスの破壊についての簡潔な報告』(1552)に述べられるフランシスコ・ピサロ（1470頃-1541）やエルナン・コルテス（1485-1547）ら征服者たちの姿にそっくりそのまま反映されるようだ。いずれにせよ、スペインの新大陸征服事業は、中世から引き継ぐ十字軍の東方征服理念の完遂、あるいは帝国主義と植民地主義という新しい二つの概念の発端を象徴する大イベントだったとしても過言ではない。強引に言えば、新大陸が「発見」された“1492年”とは、キリスト教的ヨーロッパ全体のあらたなアイデンティティ確立－近代のはじまり－であり、キリスト教的ヨーロッパ人にとっては、かれらの記憶の内部に深く刻み込まれるにしかるべく極めて衝撃的かつ象徴的年号なのである。

とはいえ、15世紀後半になるまでスペインは、711年から続いたイスラム教徒の支配から完全に逃れることはできなかった。イサベラ＆フェルナンド・カトリック両王という従兄妹同士の結婚によって1479年にスペイン王国が誕生した後、長年にわたったムーア（サラセン）人を相手としたレコンキスタは、1492年にイスラム教徒最後の拠点グラナダ王国を陥落させてようやく終結したのである。ちなみに当時このグラナダ征服はカトリック両王による15世紀の十字軍的行為と評された。

800年間にわたる長きレコンキスタが終わったのちに、多くのスペイン人が「征服」という職を失い、その後コロンブスによってあらたに「発見」された「インディアス」という東方の地に向けて渡航する許可を得ようと殺到した[5]。いわゆる、これらスペイン人たちは「征服」を職業とするプロ軍団であって、イベリア半島から新大陸へと活躍の場を移しかえただけなのだ。実際に新大陸征服とレコンキスタの間には明白な類似点が見られるという説がある。つまり新大陸の征服を企てる軍人や冒険家たちは王室の許可を取り付け、「協約」を結べば、その後は自己の責任のもとで遠征に出発した。一方、イベリア半島南部において、イスラム教徒に占領された地方を奪還するために志願して兵籍に入った人々もまったく同じようにカスティーリャの君主と契約を結び、その契約に基づいて、土地が解放されるのに応じて、その土地の植民地化を許可されたのである[6]。

閑話休題。日本でも関ヶ原の戦いののちに、いわゆる職無しとなった“戦いのプロ”こと浪人武士たちを、徳川家康が国（領地）外にどんどん放出したことがある。これもスペインの「征服」事業と背景が似ていておもしろい。

新大陸へ渡った多くのスペイン人コンキスタドールは、郷士（イダルゴ）と呼ばれる貧しい小貴族の出身者だった。特にカスティーリャの貴族は長子限嗣相続制が確立していたために、次男以下の子弟－コルテスやピサロのような軍隊経験のある多くの独身の若者た

ちが、一旗あげようと未知の世界に飛び込んでいった。これら荒くれ男どもは、たくましく、果断で、危険をものともせず、しかも頑固で短気なところもあり、時には、度を過ぎたことをする手に負えない性格の持ち主であった[7]。

小貴族よりもさらに下級出身の男たちにとっては、新大陸へ行くことは、土地も財産もない民衆の「うさ晴らし」の手段のひとつであり、貴族に仲間入りする手っ取り早い方法でもあった[8]。セルバンテスも語るように、スペイン人は金銭よりもまず富や名誉を重んじる。この辺りに今日においても資本主義的な思潮に完全に染まらない理由があるような気がするが、どうだろうか。いずれにせよ、スペインにとって遠隔地に領土を得たことは、そこが不逞の輩にとって余剰エネルギーのはけ場所となり、内紛の危機を軽減させることとなった。古代ローマ帝国の例ではないが、これが植民地というもののもっている基本的な機能のひとつであることはよく知られている[9]。

16世紀カール五世と世嗣フェリーペ二世の治世になると、新大陸で征服した土地は「個人」の世襲財産として与えられるかわりに、そこから得られた収穫物の利益の5分の1をスペイン王家に税金として納めることが義務付けされた。これによってスペイン王国は、百年にも続く征服と栄華の時代を維持できる収益を得たのであった[10]。こうしたローマ教皇以上の権力と財力を誇ったスペイン大帝国を後ろ盾とした新大陸植民地におけるカトリック教会の威力が、どれほどの強大なものであったか想像できよう。あまりに輝かしい光は黒々とした暗い影を差す。「黒い伝説 Leyenda negura[11]」（スペインと敵対する諸外国が、異端審問や新大陸事業におけるスペイン人の残虐的行為や不寛容を捏造し誇張して伝えた反スペイン感情）は、栄華を極めたスペイン大帝国が孕んだ闇の申し子である。

他のヨーロッパ諸国が文学、音楽、建築、彫刻、絵画等に豊かなルネサンス文化を開花させたとするなら、スペインでは新大陸征服事業がまさにルネサンス（再征服という意味において）そのものだった。征服者たちは中世的な人間でもルネサンス人でもなく、境界領域の人々である[12]。個人の真理の眼が開き、それまでの権威が崩壊して精神世界が解き放たれ、あらゆるものが変形して水平線が広く拡大した大航海時代。すでにルネサンスに晩鐘が鳴らされ、新しい旋風－バロック－が吹き荒れる寸前だ。バロックが、壮大な時空の広がりと無限的なるものを愛するのは、地球のすべての海が征服され、ヨーロッパ人の宇宙・世界観が大きく膨張されたことと関係しているだろう。

イギリスが新大陸に関心を持つようになったのは、スペインから遅れることおよそ百年。当時の国王エリザベス一世（1533-1603：在位1558-1603）治下、絶対王政の最盛期を迎えたイギリスは、西側の北米大陸よりも東側のインドに目を向けていたようで、1600年に東インド会社が設立されたのも北米への植民地設立よりも早い時期である。北米大陸にイギリス最初の植民地（ヴァージニアのジェームズタウン植民地）が設立されたのは、スペイン最初の北米植民地（フロリダのセント・オーガスティン植民地）より42年後の1607年であり、本格的にイギリス植民地設立が増加するのは17世紀に入ってからのことであ

る。とはいえ、実は、スペインがコロンブスを送り出したわずか5年後にチューダー朝最初の国王ヘンリー七世の命で、ジェノヴァ出身のジョヴァンニ・カボート（英語名ジョン・カボット）（1450-1498）が、1497年と1498年の二度にわたって、現在のカナダ東海岸域ニューファウンドランドおよびニューイングランド地方到達に成功している。この「発見」が、その後の北米大陸におけるイギリス植民地政策の優位な展開に大いに影響したことはいうまでもない。また、イギリスという島が大西洋をはさんで北米大陸側から見たヨーロッパの玄関口に位置していることも、地理的に有利に働いた。

1492年10月12日。コロンブスは、フロリダ南東沖にあるバハマ諸島のひとつの小島（グアナハナ）に上陸する。彼はこの島を「サン・サルヴァドール（救世主）」と名付ける（英名はワトリング島）。バハマ諸島を「インディアス（＝インド）」、キューバおよびエスパニョーラ（現ハイチ＆ドミニカ）島を「ジパンゴ（＝日本）」とコロンブスは死ぬまで信じていた。彼はその後1503年にかけて計三回遂行した探検航海によって、プエルトリコ、ジャマイカ、トリニダードなど西インド諸島と中南米大陸を「発見」する。新しい陸地をエメラルドグリーンに輝く海原の水平線上に見出すたびに、スペインの航海者たちはひざまづいて祈り合唱した。そのころの船乗りは、聖職者を除いてもっとも信仰心が篤かったらしく、どの船も当番の若者が夜明けに聖歌を歌うことになっていた。「日のあかりに祝福あれ　聖なる十字架　われらはうたう[13]」。西へ西へと進路をとる間にうたわれる半時間ごとの歌は次のようなものだった。「みんなで神に祈ろうよ　よき航海を授けてほしい　高みにおわします[14]」。

＊「アメリカ」という名の由来

コロンブスは、「発見」した島々にスペインに由来する名を次々に付けていった。イサベラ、マルガリータ、サンタ・クルス、プエルト・プラタ、ロス・サントス、ソンブレロ、モントセラト、グァドゥループ、ドミニカ・・・。現在でもこの名前のもとに人々は暮らし、大勢のバカンス客でひしめきあうカリブ海の島々。しかし、運命は皮肉なものだ。新大陸に名付けられるのはコロンブスの名ではなく、フィレンツェ人航海探検家アメリゴ・ヴェスプッチ（1459-1512）の名である。アメリゴのラテン語名「アメリクス」にあやかって、アジアやヨーロッパやアフリカと同じ女性形の「アメリカ」という名が、新しく「発見」された大陸に名付けられた。

では、命名される対象となった人物が、なぜコロンブスではなくヴェスプッチだったのか？この理由としては、コロンブスは大陸でなくカリブ海の島に到達したのであって最期まで「インディアス（＝アジア）」と信じていたのに対し、ヴェスプッチは実際に大陸に到達してアジア以外の新しい大陸だと初めて見究めた航海探検家だったからという説が一般的である。またヴェスプッチの書き記した新大陸に関する報告書が各国語に翻訳されべ

ストセラーとなり、ヨーロッパ中の多くの人々に読まれたゆえに、著者名『アメリカ』が新大陸の名前として人々の間に普及したとも言われている。が、コロンブスが記した新大陸について報告した最初の手紙は1500年までに二十版を重ね、また他の探検家や征服者達の報告書が当時の人々にむさぼるように読まれたという事実からすれば、なにもあえて新大陸にヴェスプッチゆかりの「アメリカ」を名付ける必然性は全くない。ここで重要なのは、コロンブスの到達した地が「インディアス（インドもしくは東洋の地）」とは全く異なる、それまでヨーロッパ人には知られていなかった新しい第四番目の大陸であることを、ヴェスプッチが自らの人文主義知識を駆使して合理的かつ客観的に認識した最初のヨーロッパ人であったということである。

ヴェスプッチ一族と懇意だったレオナルド・ダ・ヴィンチは1514年に「アメリカ」という名を用いているが、16世紀半ばにはフランドル地方から北ヨーロッパ、そしてイギリスとドイツで「アメリカ」呼称が正式に認められている。一方スペインは「インディアス」という名に最近まで固執していた。スペインが「アメリカ」という呼称を認めるには、19世紀になるまで待たなければならない。また「アングロサクソン・アメリカ」と対する意味での名称「ラテン・アメリカ」を正式に用いるようになったのは、20世紀に入ってからのことである[15]。

引用文献

●序

1．エドムンド・オゴルマン『アメリカは発明された：イメージとしての1492年』初版。青木芳夫訳。日本経済評論社。東京都。1999年。p.4。

●第1章

1．アンドレ・ジスベール、ルネ・ビュルレ『地中海の覇者ガレー船』初版。遠藤ゆかり、塩見明子訳。創元社。大阪市。1999年。pp.32-33.
2．ミシェル・モラ・デュ・ジョルダン『ヨーロッパと海』初版。深沢克己訳。平凡社。東京都。1996年。p.135.
3．同上。pp.138-140.
4．Clint Twist, "Magelan and Da Gama:To the Far East and Beyond" First Edition, Raintree Steck-Vaughn Publishers, Austin, Texas, 1994, p.8.
5．ミシェル・モラ・デュ・ジョルダン『ヨーロッパと海』p.171.
6．E.H.エリオット『旧世界と新世界　1492-1650』初版。越智武臣、川北稔訳。岩波書店。東京都。1975年。p.136.
7．同上。p.137.
8．同上。p.138.
9．フリードリヒ・ブルーメ『ルネサンスとバロックの音楽』初版。和田旦、佐藤巌訳。白水社。東京都。1971年。p.94.
10．同上。p.126.

●第２章

1．エドウィー・プレネル『五百年後のコロンブス』初版。飛幡祐規訳。晶文社。東京都。1992 年。p.19.

2．同上。p.19.

3．サルバドール・デ・マダリアーガ『コロンブス正伝』初版。増田義郎、斉藤文子訳。角川書店。東京都。1993 年。p.44.

4．ミルトン・メルツァー『コロンブスは何をもたらしたか』初版。渡会和子訳。ほるぷ出版。東京都。1992 年。pp.44-45.

5．増田義郎『黄金の世界史』初版。講談社学術文庫。講談社。東京都。2010 年。p.117.

6．同上。p.120.

7．同上。p.120.

8．フェリペ・フェルナンデス＝アルメスト『1492　コロンブス：逆転の世界史』初版。関口篤訳。青土社。東京都。2010 年。p.13.

●第３章

1．マリアンヌ・マン＝ロト『イスパノアメリカの征服』第二版。染田秀藤訳。白水社。クセジュ文庫。東京都。1992 年。p.8.

2．Sharryl Davis Hawke & James E. Davis, "Seeds of Change : The Story of Cultural Exchange after 1492" First Edition, Addison-Wesley Publishing Company, Menlo Park, California, 1992, p.7.

3．マン＝ロト『イスパノアメリカの征服』p.7.

4．Jerald T. Milanich & Susan Milbrath, "Another World" Edited by Milanich & Milbrath. "First Encounters : Spanish Explorations in the Caribbean and the United States, 1492-1570" First Edition, University of Florida Press, Gainesvill, Florida Museum of Natural History, 1989, p.10.

5．マン＝ロト『イスパノアメリカの征服』p.9.

6．同上。p.12.

7．J.H.エリオット『スペイン帝国の興亡 1469-1716』初版。藤田一成訳。岩波書店。東京都。1982 年。p.62.

8．マリアーノ・ピコン＝サラス『ラテンアメリカ文化史：二つの世界の融合』初版。村江四郎訳。サイマル出版会。東京都。1991 年。p.49.

9．J.H. エリオット『旧世界と新世界』p.134.

10. John A. Clow, "Spain : The Root and The Flower" Third Edition, University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1985, p.152.

11. ルイス・ハンケ『スペインの新大陸征服』初版。染田秀藤訳。平凡社。東京都。1979 年。p.310.

12. ピコン＝サラス『ラテンアメリカ文化史』p.53.

13. サミュエル・モリソン『大航海者コロンブス』初版。荒このみ訳。原書房。東京都。1992 年。p.64.

14. 同上。p.65.

15. ジャック・アタリ『歴史の破壊、未来の掠奪：キリスト教ヨーロッパの地球支配』初版。斉藤広信訳。朝日新聞社。東京都。1994 年。P.313.